
リハビリ ラブ

黒田容子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リハビリ ラブ

【Nコード】

N 8 1 4 6 X

【作者名】

黒田容子

【あらすじ】

イマイチ、恋とか愛とか興味が持てない。「モテ服・モテメイク・モテ髪」「恋活・婚活 パワースポットめぐり」そもそも、なんでそんなに「恋愛」を皆もてはやすのかしら？ 冷めたお局OL：牧瀬詩織 は、「そんな自分も嫌いじゃないんだよね」と今日も思っていたんだけど。取引先の担当者が変わったことで、ちよつとづつ ちよつとづつ日常が変わっていく。

恋って しなきゃダメなの？

男ウケに モテ服、出会いに 恋愛成就、婚活に パワースポット
巡り

ああああ、そんなに世の中 恋愛したいの？

恋愛しない若人、非国民。ぐらいな世風がめんどくさい。

結婚なんかするより 慎ましく生きていたって思っているのに。
世の中って不思議よね。

まきせ しおり
牧瀬詩織 34才

適齢期すら卒業のおーえるでござい

昔から 出会いにも恋愛にも無頓着で過ごしてきたら あつという
間に 40が見えてきた

でも別に。後悔してないのよね

別に 無理して恋愛しなくても。

収入さえあれば 女でもマンション買える時代でしょ、怖いものな
いわよ

聞いた限りの話では 年収の三倍までのローン、組めるんでしょ
贅沢言わなかったら 買えるなあと思って 最近探し始めた私

仕事は だいたい順調

周りに踊らされることなく 手堅く就職活動した甲斐あって 中堅
どころの物流会社に決って。いまや リストラとは無縁の陰の局
OLになりかかってる

恋愛なんて しなくても生きていける
男なんて 頼らなくても生きていける
そんな私の独身謳歌ライフの物語

冷め切った女の心

ある日のお昼過ぎ

営業のフロアがざわめきたった

社内メールで回った回覧が原因っぽい

…ウチの大口客先が グループ内統合により 取引減少表明、だってあちゃー 大痛手ね

しかも 吸収する側でなく 吸収される負け組。望み薄い… かな、こりゃ

「来週、統合を経ての新しい責任者が 分かるらしい」

担当の営業が 「ぜひ 後任に会わせてください」 って 必死に電話の相手に訴えてる。

そりゃ、必死にもなるわよね。この、ただでさえ不景気の中ですもの。部署の存続が掛かってるからなあ

噂の後任は、程なくして名前がわかった

しかも ご丁寧な 挨拶に来るって

客が自ら訪ねてくるなって、珍しいわよね。

たまたま 外の自動販売機へ コーヒーを買いに行った時、それと思しき二人とエレベーターに乗り合わせた。

入館のバッチを付けている男二人組

行き先と訪問時間からいって たぶん そう。

「旧担当者と新担当者」

なんか 冴えない中年男と ラフにスーツを着こなしている若い男。

その取り合わせにビツクリした

冴えない担当が旧。

若い男が新。

インターフォンを取り次いだ総務の女の子たちが「最新のアタリ男子」「メガネイケメン」と、キヤーキヤー言ってる
ふーん、あれがカッコいいっていうんだ。

めつきり「オトコ」がご無沙汰になった私には、別段何の感傷も浮かばなかった。

普段、バラエティ番組なんて どこが楽しいか分からないから 見ないし、恋愛なんて、4年ぐらいしてない

オトコなんて、ここ数年 興味自体持ったことない

「人気俳優」とか「カレ」なんて言葉にもときめかない
すべてがふーん、って感じ

頼まなきゃ入れてくれないお茶が今日は早くも入れられてる。

美男子は、女子の目の色が変わる。

オンナって、めんどくさいわね

ただか アポイントの来客1回で どころなれるわけじゃない
のに…バツカみたい

そうはいつでもね

一応 お客さんだし 馬鹿馬鹿しいけど もう一度 見に行ってきた

物陰からみた「新担当者」とやは

背が高くて がっしりした痩せ型。肌は色白で、緩い7：3

通った鼻筋、鼻は少し大きめ。小鼻が少し目立って　ちと残念くらいなもので、額は小さめ。形は　いいかも
髪質はネコっ毛。髭は濃くない。むしろ、ツルツル
特徴は　メガネかしら？　細いスクエア型のオシャレインテリっぽいデザイン
アタマ良さそうに見える。

よし、覚えた

もう。はい、用はないわね。

ふーん、あれが　今で言うイケメンなんだ。

まあ、整ってるっちゃー整ってるわよね
ふーん

「牧瀬君」

課長に呼ばれて振り返った。ちょっと、不躰にガン見しちゃったかしら。大丈夫よね？

「この名刺の会社宛に、発注依頼書のテンプレートを送っておいで」
」

名刺を受け取り、当たり障りのない文面でメールの文末を締めくく
り！私は送信ボタンを押した。

さーて　ちょちょいのちょい。と。

パソコン右下の時計は　もう、12:00過ぎている。

今日は　ちょっとずらしてご飯ね。

ちよっと閑散としたフロアを見ながら、どこでランチにしようか
電気のついてない天井を見上げた。

もう、さっきの「イケメン」とやらは忘れてた

転がり込んできた イケメンとやら。

頼まれ仕事も終えて、溜めてる仕事の締切もまだ 時間がある。
今日は 追われてないまま食べられる昼食のひととき。

お気に入りの定食屋へ向かった。

職場から近い上に、誰も趣味じゃないらしく 会社の人と会わないのよね。

一番好きなのは、カウンターの席。寿司屋っぽいモダンな御ざぶがある椅子が 好き。

穴場だから気に入っているんだけど、シュウガ焼き頼んでいたら

「（あ、さっきのメガネ）」

颯爽とすぐ隣に座ってきた。

ほら さっき、ウチの会社に来た例のイケメンって人。

なんで よりによって隣に来るのよ…

そっか、カウンター席 ここしか空いてないからか…

さっき 会ったのも 忘れてるみたいで（というか、物陰から見ていただけなので、多分 気付いてもいないのかも） あちらは「肉

じゃが定食」とか 頼んでる

ま、会社付き合いなんて そんなもんよね

まあいいか。

でも、一応 面倒くさいから 不自然じゃない程度に テーブル席へ変えようと 立ち上がった。

だって 面倒くさいじゃない？なんか。

まるで トイレへ行くくらいな自然に立ち上がって。

そのとき、何か パタリと音がした気がした。

足元を見回しても、心当たりになるようなものは落ちていない…

やっぱり気のせい？

じゃあ いいか。と 歩き出した矢先の事だった

「落ちましたよ」

隣奥にいたイケメンさんとやらが 話しかけてきた。

振り返ると、差し出されたのは 私の社員証。

入社当初の初々しくて（まだ）かわいい顔写真が刷り込まれている
できれば見られなくなかった、私の社員証…まさか 拾われるなん
て。

「ああ どうも」

あわてて、手元に受け取り、ストラップで証明写真を隠すように力
ードを巻いた。

そして、そのまま制服のベストポケットへ

「さつき、会いましたね。牧瀬さんって、いうんだ」

失礼、そちらの事務所で目が合ったから。悪気なく言う顔がさわや
かだ。

「先ほどは、ご足労いただきまして…」

一応、社交辞令で会話を返してあげた。

頭の中では、面倒くさいい が大連呼

面倒くさい・でも邪険にもできない 葛藤がくすぶっている

オマケに 警戒心は 悪い感じに感度良好

だって 事務所で一瞬すれ違っただけで、顔を覚えられてる。
軽いオトコ？

「これから戻られるのですか？」

社員証を拾ってもらった引け目あるだけに、席を変えるのは ちょつと諦めた

「今日のところは、一旦ね」

のんびりいう言い方は ちよつと好印象。警戒感度低下中。

下手な愛想もないのが 変に意識しなくて、話しやすい、かも、かも？

「実務やつてる人だよね？ 俺、発注書とか打つの、遅いかも。先に謝っておくよ」

「手書きでも、読めればいいですよ」

「そつ、よかった。これからよろしく」

会話はそれだけだった。あちらのケータイが鳴って そのまま帰ってこなかったから。

会社に戻ったとき、営業と課長に呼び止められた。

「さつき来た 新しい担当者、俺苦手でさ。やり手っていうか…キツチリしてて全部覚えてそうだから 誤魔化しが通用しなそうなんだよね」

「当分、表立った不手際もできないから、牧瀬さん、担当頼める？ はいはい、わかりましたよー

要は 新人に引き継げるまで 私が 書類関係と諸手配をやれってことね。

人間関係が出来上がって、「すいませーん やっちゃいましたー」で通るようになるまでは 私がやるって訳ね。

私が、このフロアで重宝される理由の一つが、反抗しないお局だから。

多分、事務職が向いているんだと思う。

目立った自己主張もしない、思い切った提案もしない。

良妻賢母よろしく、慎ましやかに やり漏れ仕事を拾っては 軌道修正している

私が居ないと部署が回らない。

そのためか、人事異動の波にも攫われずに済んでいるし 人事面談も5分で済むという 超手堅い社員
我ながら、安全パイ生活

「（また仕事増えたなあ… まあ 頃合をみて 誰に引き継ぐかか
んがえよーっと）」

そんな事を考えながら、席に戻ると メールが届いていた。

差出人は Takanori Obayashi と表示されている

だれが 何の用だろう、それは、本文をみて分かった

To:Shiori Makise
From:Takanori Obayashi

大林です

先ほどは、食事時をお邪魔しました

早速の依頼書テンプレート、ありがとうございます

慣れないうちは ご迷惑かけると思いますが 宜しくお願い致します

.....

添付ファイルには、私が午前中最後に送った例のメールへ貼り付けたもの

そっか：

この人、あの時の名刺の人なんだ。
例の「イケメンとやら」さん

素直でかわいいなと思った。

曲がりなりにもお客さんだし、たぶん この人、年下だろうから、
軽んじるのも大人気ないと思って。

一旦返信を返してあげた

.....

To: Takanori Obayashi
From: Shiori Makise

お世話になっております。

ご確認いただき、ありがとうございます。

今後とも、どうぞお気軽に ご相談ください

.....

その日の帰り。

ご丁寧にもまた返信が来た

.....

To:Shiori Makise
From:Takanori Oobayashi

そういつてもらえると、気が楽！

.....

なんか かわいいかも。

正直 担当者が変わった「覚え直しの仕事がある 手間でしかないけど 気さくな人は 嫌いじゃない
私はこっそり、「大林くん。」と呼ぶことにした。

なんか、律儀で礼儀正しくて。
正直に、「打つのが遅い」って申告してくるあたりが、素朴さあつていいよね。

営業たちは、「あの人 キレ者すぎて怖い！」「笑顔で人を殺せる人」とか怖がつてるんだけど… ちよつとだけ ひっそり笑った。

仕事の相手なんて、顔はどうでもいいけど 中身が伴っていれば頑張れる。

仕事増えたけど、楽しい仕事なら まだいいか。

あれから数日後。
自分宛に電話が掛かってきた。

いや、違うの。営業が誰もフロアにいないくて、「牧瀬さん、お願いします」

新卒2年目の女の子が 電話に出るだけ出といて、後は頼みますとわざとらしくトイレへ向かっていく。

やられた。逃げられた。

…自分に答えられないからって先輩に振るのはいいけど、トイレはないんじゃない？隣で何の会話だったか聞かないと仕事覚ええないのに…

ふう、とため息なのか 深呼吸なのか。ひとつつぶやいて。

「お電話変わりました。牧瀬と申します」抑揚のない声で電話に出た。

「どうも、大林です」

あ、『大林くん。』

ちよっとだけ ささくれ立った気持ちがある なめらかになる

内容は、営業の人なら誰でも答えられた簡単な質問だった。

あ、どうかな…あの子、答えられるかな。ま、いつか。

「では」と電話を切ろうとしたとき。

「あつ、もう少しいい？」

電話を伸ばされた

「エクセル、詳しい？」

何かと思えば 今度は この前送った見積り提案書の話

私がかっそり組んだ関数に気が付いたらしい

「俺、全く詳しくないんだけど あ她表示あると便利だね。」

ちよつと嬉しくなる。

自分のシゴトを察してくれた御客さんって　なんか嬉しい。
ちよつとだけ　調子にのりながら　話をしてしまった。

「あれ、関数っていうんだ。勉強になったよ、ありがとう。　自分でも　勉強してみる」

その時　電話は　手短に切れたけど、
大林さんの勉強熱心に火が付いたらしい
その日からというものの、私が関数を組んだら、どこかに　関数を入れ返してくるようになった

「こんなのあるわよ」細工したら、必ず気がついてくれて、それを
「それならば、こんな方が」微妙に再細工して返してくる
まるで　ワークシート上での技比べ。
お互い　ちよつとだけ本気でちよつとだけ遊んでる

私が「やられた」って言ってる頃、きっと大林くんは「どう打ち返してくるか」ニマニマ考えてる
きっと　逆もある

ちよつとちよつと？
久しぶりに手応えのあるお客さんじゃない？
なんか　これって　楽しいかも？

戦いの場合は、エクセルが有る限り　フィールドがある
時には、見積り書
時には、プレゼン資料

はたまた時には、過去の履歴データ、請求明細

まるでそれは エクセルを通した秘密の交換日記
いつしか ただの計算式は 関数勝負になり、この頃はついに マ
ク口勝負になってきた

だって 大林くん、本当に 勉強熱心なんだもん。

シレッと「メール、返信しましたから」っていう割には だんだん
高度な知恵が付いてきた

うふふ、ちよつと 手応えあつて 面白いわね

実は、こう見えても 独学社内S Eの私。

社内から 頼られるばかりで やむにやまれず勉強して覚えた。
覚えた知識で それなりに、フロアの（というか、このごろは 「
社内の」？）面倒事を手伝つては、さらに経験は積ませては、もら
ったけど。

この頃は いい加減「（その程度のことくらい、出来るようになってよ）」「ウザくなってきたトコだった。

新鮮味がないというか、こちらの向上心を満たしてくれるような、
楽しませてくれる人もいなくて。

ぶっちゃけたところ、毎日に 実は若干 退屈してたのよ。

相手はお客さんだけど、多分それなりに頭のいい人だと思う。

適度に程よく アカデミックに遊んでくれる人が現れて ちよつと
面白くなってきた

いつしか私は、「終わりになき 終わらないでほしい戦い」と銘打つ
ようになった

風邪をひいた心は

この頃 正直 忙しくて 嫌な感じ。

理由は 大林くんの会社が 繁忙期に入ったから
仕事がある、オーダーがあるのは 確かに有難いお話だけだね。
さすがに、連日 残業つても 結構 堪えるのよね

「もーいやっ！」

背伸びしてる中 FAXが受信する音が聞こえた
相手は またもや 大林くんの会社
嫌と思ったそばから また 依頼かあ…
何度目かの「もーいやっ！」を 呟いた

後輩は 一通り帰した

…っというか

面倒になると 人に投げて逃げてるチャッカリちゃんだから ど
うせ 戦力にならない
本人も 自分のキャラクターを分かっているのか 見え透いた
演技で帰っていった。

定時前後になると ケータイ持って トイレ行くのは どうせ
誰かと用があるんでしょ？

繁忙期の最中くらい 空気読んで 仕事してよ、と思うけど
口を訊くのも面倒で 黙って見送った

先輩…というか 営業たちは シレッと直帰
取ってきた仕事の経過なんて 興味なくて 手配の結果と入金額し
か気にしてない

事務所は 残念ながら 私人。

…残念ながら？

本当にそうかしら。面倒くさいのがなくなった分 少しでも
気が楽になったかも

「では、先程の 千代田区の件で 本日は 打ち止めですね？」
とつぷりといい時間になった夜の事務所。

「すみませんね、あれで最終だから」

大林くんから 謝り電話が掛かってきた
ああ、と返事が返される

やった、終わりだ！ 喜んだ側で

「帰り、遅くして いつも悪いなどは 思っではいる」神妙な言い
方された

「…まあ… お互いさまですから…」

当たり障りのない言葉で 当たり障りのない話し方で 返す
仕方ない、とは 頭では思ってるし、ね

謝って貰ってるから 正直 もう割り切るしかないんだけどね。
でも やっぱり ちょっと 恨み言の一つも浮かんでくるものなの
よ

無言の空気が ちょっとだけ 重たく黒くなる。

それを悟ってくれたのか「牧瀬さんって 家、近いの？」

帰宅を 遅くして 申し訳ないと 言いたげな雰囲気

「まあ…はい」

プライベートに踏み込んだ質問に 答える必要もないけどね、本当
は。

「独り暮らしですよ、近場で。」

気持ちが ひび割れカサカサな感じだったから 今は 無性に 話し相手が欲しかった

ウチの職場に、入社五年目の男の子（営業）がいる。

いつも、ケータイいじりながら 何をするでもなく 居残ってる
帰ればいいのに。 最初のころは そう思ってたけど、

あ、帰らないのは 近くの会社につとめるカノジヨさんの仕事上
がり待ちかしら そう気付いてからは 「居ないもの」と思う
ようになった

それでも、フロアに一人も いなくなると。

やっぱり 気持ちががらんどうになって なんだか風邪を引きそ
うになる

今もやっぱりそんな感じ。

客先の担当者：大林くん と 受注の実務担当者：わたし。

お互い 電話で仕事とは無縁の世間話をしながら、自分の残務をし
ている。

電話のむこうで、キーボードを叩く音が聞こえるし、私が電卓を叩
いている音も もしかしたら聞こえているかもしれない。

「毎年 繁忙期が誕生日なんです。

祝って欲しい歳じゃないけど、この会社入ったときに 諦めまし
た」

アタシ、なんでこんなことを お客さんの担当者へ話しちゃって
るんだろう。

そうは 思っても、言わずにはいられなかったんだよね。

毎日 会社 職場の往復 だけの生活に、寂しくなってた。
だって、連日 残業よ？

しかも、当の電話の相手のカイシャで。

観たいテレビだって、全然 見れていない。

寄りたい定食屋にも 行けず。

息が抜けてない、からんからんの心に、誰か… 構ってくれる大人
が居て欲しかったんだもん。

「ふうん」

電話の向こうから 優しいため息が聞こえる

疲れて 一安心したときに、つつい漏らしちゃう 深い息

「そうなんだ」

クスッと笑う声の向こうに、キーボードを叩く連打音が聞こえる。

きっと エンターキーを打って、テキストボックスを渡り歩いているのかしら。

「職場から 何か貰ったりするの？」

笑う 柔らかい声に促されて 「残念ながら この時期にそういう
催しはないんです」と答える。

「実はね、会社員になったとき、憧れてたんです。

ちよつとオシャレな居酒屋でサプライズパーティとかバーで乾杯
とか」

でも 現実 は 甘くなくて。

自分の誕生日の時期は 繁忙期だし コレっていう 先輩も後輩も
いないし

極めつけは、

「そもそも、もともとが　ウチの会社　車通勤多いから　飲みにいけないんですね」

就職してから　我に帰って気がついたんだけど。

物流会社は、「人の便」よりも「物的流通の便」がいいところに社屋を構える。

だから、正直、電車とバスの便がいいところには　営業所がないことが多い

失敗した、と思ったけど

無駄に華やかで、息苦しいケバケバしさと縁が切れると思えば、自分を慰めることはできた。

一番面倒だと思ったのは、「ランチメイト」という名の「昼休みを一緒に過ごすだけの友たち」

それが居なくて済むだけ、今の職場は　居心地がいいと思う女同士の見栄の張り合いとか、リアルに煩わしい。

無くてよかった。

「へえ、誕生日になったら、欲しいのは　物　じゃないんだ」

んー　別になんでも？

なくてもいいし。

この年になると、ある程度　買い揃ってるから、すごく欲しいとかも無いんだよね。

キャラクターグッズとか　遊園地とかも卒業してるし流行とか興味ないから、映画とかドラマも見ないし。

部屋に荷物増やしたくないから、雑貨とか　アクセサリーも　気に入らないと買わない。

「あ、それ　わかる気がする」

大林君が ふふふっ と笑う。無邪気に聞こえる声が なんかいい。

「じゃあ、繁忙期 終わったら 打ち上げやるうか？ ビリヤード、やる？」

「ビリヤードですか」

あんまり。っていうか、学生時代 やってる人がいたというレベルで。

「ハマるかどうか は分からないけど、教えてあげるよ。」

俺、今 トリックキーに散らしてくれる練習相手が欲しくてね。」

練習相手？ んん？

「それって、ど素人の未経験者だと、ミラクル的な展開起こしてくれるからって意味ですよね？」

なんか、体よく誘われてる気もするけど 軽く「遊ぼうよ」と誘ってくれるのは なんか 純粹に嬉しいかも。

社交辞令だとしてもね

「じゃあ、決まり。」

俺がよく行くところは、バーが 併設されてるから、飲みながらでもできる。

ノンアルコールカクテルも たくさんあるから、そこそこ 楽しめると思うよ」

あ。

決まっちゃった。

私、なんか、遊び相手もない 寂しい女と思われたかな？

ま、いつか。

大林くんだった　　どうせ　そんなもんでしょ？

あたしは所詮、業者の担当者…しかも　一回しか会ったことがない程度の「電話とメールだけの間柄」を　　自分の趣味の練習相手に誘うんだもん

そんな褪めた私は「男の人と　夜に二人で会う」のが　久しぶりなのにも関わらず　イマイチ　盛り上りを感じていなかった

慣れない事をしてますけど、なにか？

あの電話から、何事もなかったかのように 翌日を迎えた。

そして、無情にも流れてくる依頼書のFAXに埋もれながら、そのまま10日ぐらいを過ごした。

「来週の中頃には 落ち着くから。」と大林くん に 例のビリヤードの場所として指定された店は なんと 私の自宅の隣駅から少し歩く位置だった。

古いアミューズメントホールの玄関、 20:00 待ち合わせ

ここつて、みるからに老朽化して ネオンも 疲れてるから

今まで 完全にスルーしてた

磨いても落ちないだろう曇った窓ガラスから見える お酒のビンたち。

バー、が 確かにありそうな気はしてた。

だからって、ここで 自分の会社のお客さんが遊んでいたなんて、ちよつと 意外。

世間って狭いなんて思う。

今回、別段、特別な事な気もなかったから、課長にも営業にも言わなかった

毎晩、一人で受発注のやりとりしてたんだもの、関与してこない奴が悪いとおもって。

時間にほぼ丁度の頃、大林くんが現れた。

「じゃあいこうか」

おぼろ気な記憶通り、「イケメン」と呼ばれるだろう人々の特徴を備えてる。

このとき初めて、お化粧品も 何時もどおりぐらいたった事を思い出した。

まあ、今からお化粧品直しっていったって、ポーチの中身自体が 必要最小限だし。

そういう意味じゃ、私って 営業はもちろん 合コンとか むいてないかも

いつか、別に。

暗がりの店内に差し込む賑やかな照明とゲーム機の効果音をかき分けながら 二人で ビリヤード台となりのバーカウンターに進んでいった。

「久しぶりだねえ」

いらっしやい、と マスターとおぼしき人が 手をあげてくれる。

大林くんが 「いつもの」といいながら 椅子に座るよう、私を促す。

本当に行きつけなんだ。

マスターが 私へ 「ようこそ」 ニツコリ会釈しながら、大林君と会話を続けた。

「この前、クマ吉が 今の上司とその奥さん連れてきたよ」

クマ吉。共通の知り合いかな。多分そうなんだろう、「へえ」と大林君が答えながら 「ジャケット 掛けなよ」ハンガーを渡してくれた。

私が会話に入れないながらも、一連の動作みたいなスマートさのある気遣い。さりげない感じが 「（そういえば 仕事中也 そういう気遣い出来る人だったなあ）」と 思い返させる。

絶妙なタイミングで「飲みたいモノがあるといいんだけど」おしぼ

りとメニューが回ってきた。

初めてみるバーのドリンクメニューは、ちょっと固まっていた。

居酒屋よりもザックリだけど、すっごい量が多いかも。

文字ばかりで写真がない。全然イメージがわからないわ。…思わず面食らってしまう。

途方にくれかけた時だった。

「折角だから、アバウトに『こんなのが飲みたい』相談で作ってもらうことも出来るよ」

大林くんの一言助け舟。

…バーとか来たことがない私には、有難い…恥かなくて済みそう。よかった。

巧いエスコートに甘えることとして、メニューを見つつ。

私は、「（お気軽にご注文をどうぞ）」待ち構えてる気がするマスターの視線から安全にフェードアウトできた。

飲むなら、甘いリキュールベースがいいな、そんな事を考えている最中も、マスターと大林くんは、ぽつぽつと会話を続けている

「柏木さん、だっけ？あの人もビリヤード巧いね、なんかクマ吉と楽しそうにやってたよ」

「へえ。柏木さんもやるんだ」

にやつと控えめに笑いながら話す大林くんの横顔。

ずーっと自然体で無駄に笑うことも、話すこともないけど。

ゆっくりとした深い息の合間に笑っているのが分かる。

大林くんって、何歳だっけ？あ、そもそも聞いたこと無かったわ
年下だとは思っただけど、雰囲気に着きがある割には、童顔な
んだよね。

そもそも 今日とは2回目に会うから、前回のイメージ自体が曖昧だ
った。

「（そうそう、こんな人だった気がした）」程度から まじまじと
見ると、思いの外 幼い顔をしている

「どんな感じなのが飲みたい？」

ぼーっと 大林くんを見ていただけだった私に、マスターが「おー
い」と言わんばかりに 声を掛けてきたところで、ようやく我に帰
ったのであった…

久しぶりに男の人と一緒に シュチエーション
慣れないことをやると なんか 調子狂うわね、あはは

確実な「また今度」

元々 淡泊なのか。

余り 人見知りをしない反面、離れていっても 追い掛けてま
で執着しないのが私。

利害だけの人間関係を持たなくても やっていけちゃう位の…ア
レですよ、アレ。

それはそれで 大人でカッコイイと思ってる自分もいるけどね、
ときたま 寂しくなると 選んだ潔さの故に すぐりに行
くアテが乏しかったりも、するのよね。

生まれて初めて入った「バーカウンスター」

作法も、流儀も分からない

何か一つ頼むにしても、一苦労。

けどそこは 流石 接客のプロだと思った。

「気取ったフルーツジュースみたいなもんだよ。」
軽い前置きの後

「甘いのと大人の味、どっちがいい？」から始まって「じゃあ 旬
のフルーツで フローズンなんてどう？」とか「お腹に溜めたい感
じ？ それとも、流し込みみたい？」

上手に 選択肢を見せてくれながら その実 絞り込んでく
れている

結局、大林くんが飲んでものと同じにしてもらった。

「甘いんだけど、ほろ苦くて。さっぱりしているんだけど、パンチが効いてるお酒」

マスターは、ニヤツと笑って「大林くんに出したモノとは　　ちょっと小細工するね」

滑らかな動作で　　器を並べ、液体を混ぜ、巧妙な手付きで飲み物を調理していく。

一品仕上げる「調理中」は　　どこか　　キッチンの道具たちと戯れているようで。

つつい　　魅入ってしまう

食い入るように　　マスターの手元を見ている私をみて、何か思ったのか。

大林くんは　　「先に　　遊んでる」と、腕時計を外して　　腕捲りを始めた。

それは　　ほどなく離れた、会話が聞こえるかどうかの距離。

うん、良かったわ

大林くんなら　　大丈夫だろうと踏んでいた安堵が　　やっぱりちゃんと　　保証されてる

なにつて…

間柄を急に詰めてこられるような　　積極性…（ウザさともいう）

…が　　まるでないから。

むしろ、助かるって感じかしら？

だって、かんがえてみようよ、

男女が　　夜に二人きりで　　バーカウンターにいたら。

口説かれたり、そのあと　　どうこう進むが　　規則かのような風

潮あるじゃない？

なんかよくわからないけど、世間的なそんな「流れ」ってやつ
それが嫌だったの。

もしね、もしよ？

一步 譲って それが私の勝手な偏見だとしても、自分をいつも
以上に 繕うのは 好きじゃない。

例えばそれが、超大手グループのカイシャに勤めてる若手の中間管理
職のメンズで、
業者の立場にしてみれば、手厳しくとも話が通じる理想の仕事相手
な「デキる男」だとしても。

我ながら 自分ルールの打算で動くところはあるけど、恋愛とか
交友とかは 一段と食指が 動かないのよね。

「アタシのテリトリーに入ってこないで！」乱すモノは 私の前に
立たないで頂戴ぐらいな？

… だから 私は『淡泊』だと 評している。

我に帰った時、おまかせしました、と ラフに注がれたカクテル
が出てきた

「どうぞ。ちよつとだけ お酒が入ってるレモネード」
聞けば、

「大林くん、いつも 車で来るから飲まないんだ。
ウチのレモネード、気に入ってくれてね 最初はいつもこ
れなんだ」

さりげなくイタダキマスを唱えて 口をつけた。
あつ、これはすごい。自分が知ってる、本物のレモンの味。

自動販売機とか 食卓にならぶ瓶詰めのリモン果汁とは ちがう、
ほんのり薄皮を舐めた味と 剥いた時の香り

「リアリティある。…レモンだ」

ふふふ そういつてくれて 嬉しいよ

マスターが 照れたように笑った

「くつろいでいって。暖かいお茶とかも出せるから」

何度飲んでも、これぞって 言葉が 思い付かないな、このレモネード

しっとりとした気分で、手元のグラスを眺める。

それぐらい美味しい手元の飲み物に 気分も酔いしれてきて、マスターとたわいもない世間話を 楽しむ。

ぼちぼち続けているうちに、レモネードも 氷が当たるぐらいに減ってきた

話してるだけじゃ、物足りないくらい ちょっと 欲が出てきたかも??

「大林くん、そろそろ 遊んであげなよ」マスターが 声を掛けてくれた

「ああ、ごめん」

一人で打っては練習していた大林くんが戻ってきた

「じゃあ 始めようか」

ルールは? って聞いたら 「あとで」 だって
でも、聞かなくて良かったかも

「とりあえず、この球を ここに当ててごらん」とか
「この玉を、ここへぶつけてごらん」とか

言われた通りに打ちに行くので精一杯
ゲームなんて　なかなか進まない

でも、マスターも　大林くんも　何も言わないで見守ってくれるの
が　気持ちいい

「トリッキーに散らしてくれから　いい練習になる」
気を遣っていつてる風には思えないほど　大林くんは　淡々と

玉に狙いを定めている

その我を忘れてる顔が　正直　安心させてくれた

私も、下手なりに？　頑張つてコツを探るのに集中しちゃった
仕事とか　家の事以外で　夢中になるって　久しぶりかも。
なかなか　楽しいものね

好きなもの飲んで、話したくなったら　マスターと話して
それでも　物足りなくなったら、玉突き遊びに構ってもらおう。
すっかり　居心地のいい空間に味をシメて　私はホクホクの上機嫌
だった。

ビリヤードって、頭脳戦でありテクニク戦。

無理に話さなくても、ゲームが成立するし、自分の世界に入っても
怪しまれないのが、ちょっと　気に入った、かも。

：　大林くんって、若い顔して渋い趣味持つてる。

店に入って　二時間くらいしたかもしれない。

お互い、何となく集中力が切れて、だらんとした感じ。
どちらとも言ふことなく「帰ろうか」になり、席を立った

「またね。気を付けて」

背中越しにマスターの声が聞こえ、「ええ　また来ます。」多分
社交辞令じゃない声で答えられたと思う

店から外に出る階段を進みながら、大林くんがいう。

「ありがとう、俺も楽しかったよ」

このドアを開ければ、今日のイベント？は本当に終わってしまう。

大林くんが、電話のむこうだけで、接点が続いてた「取引先のお客さん」に戻ってしまう。

あれ、ちよつと　惜しいと思ってる？私。

「おかげさまで、私も　楽しませていただきました」

甘いような、苦いような空気が流れる…心のアラームが、居心地悪いですと訴えてきそうになる。

それを破ったのは、大林くんだった。

「じゃ、また！」

すぱつとした、別れ方。

颯爽とした後ろ姿が　潔くも　味気ないくらいサッパリしている。

ちよつとだけ、良かったと思う自分がいる。

いけない、いけない

今はよくても　今後は　きっと　面倒ごとになる。

面倒を孕む人間関係なんて、手間だもの、いらない。

冷たい外気を、気合で吸い込んで　よしっ　と強気とともに吐いて。
私は　家に向かって　勢い良く歩きだした。

ぶっちゃけたところ、お店自体は　超気に入った。

マスターが 黙々とカクテルを作る姿を見ているだけで、後学になるというか・・・飽きない。

人が仕事をしている姿って、好きなのよね。

私って、よっぽど「仕事」が好きなんだと思う。

いや、仕事中毒みたいな そこまでの熱心さはないんだけどね、

「精進」とか「道」みたいな邁進できる本職って カッコイイ
と思っちゃうところがあるから。

人間関係の煩わしさとは 外界へと廃して、淡々と進んでいく環境
って あこがれる。

そんなわけで、一人で飲みにくることも 増えてきた。

偶然 大林くんに会ったこともあったし、マスターの紹介で 違う
人と対戦する大林くんを見かけることもあった。

大林くんは、実際、本当に「コソ練」相手が欲しかったらしい。

通称「クマ吉」というライバルがいるのだそうで「ここぞとおもう
ところでも、ミスをしない」強敵なんだって

「この俺が、ついに コソ練が必要になってきたわけよ」と笑って
いた

偶然会ったときは たまに 相手になったりした

私は、勝負とかが出来る次元じゃないけど やっぱり 大林くん
にとっては、いい練習相手らしい

いつしか「じゃあ、また」ここでまた会うのが、当たり前前の毎日
になっていた。

シェルター生活

この年になれば 焦ることはなーんにもない
そのまま ズルズルと 「オバサン おばあちゃん」街道を
歩く道もある
道がない訳じゃないから、別にいいじゃん

あれから ビリヤードも 何となく 巧くなってきた
自分で楽しいと思うようになってきた頃から
大林くんからも 「予定、空いてたら やらない？」誘われるこ
とも 珍しくなくなった

ひよんな出会いだったけど いい距離だとももう
会ったのに お互い ビリヤードって気分じゃない時は ボ
ーリングにする

調子が良くなくなって思ったら そのまま口に出せる間柄が
やりやすい
2ゲームぐらいやったら 二人で一杯

憧れてたバーのカクテルにも 詳しくなった

はたから見たら カップルにみえるかもしれない
けど 本当のところは お互い 練習相手ぐらいにしか見て
ない

大林くんは 色気も男らしさもあるけど、お互い そういう気
分を持ってない

…むしろ なんか 疲れてる、気がする。愛とか恋とか

マスターも　　そういう目でみないから　　居心地良かった

二人でいることで　　世間の「こうじゃなきゃいけない」から
身を寄せあつてる感じ

ここは、居心地のいいシエルター
世間の押し付けが暑苦しいから　　私たちは、ここへ逃げ込んできた難民

大林くんといえば。

確かに、それなりにカッコよくて、話も当たり障りなくうまくて。
もし　彼女がいても　妬いたりしないけど　　まず　居ないよう
な気がする

居ないだろうな、こんなマイペースな子

本人の名誉のためにいうけどね、最初は　　居てもおかしくないな
って思つたの

でも　　この頃は　　居ても続かないだろうなと思つた
愛想笑いがない、あまりお世辞とかもない。知らない人がいると話
さない。

話題を振れば、話してくれるけど、会話が的確すぎて　　すぐ終わっ
てしまう。

きっと、私に対しても　　多分　　同じこと思つてるだろうけど
別にいいんだあ

男女が揃つたら　　なんで　　恋愛しなきゃいけないの？
そのプレッシャーが暑苦しい

大林くんは　　その押し付けがない

黙って呼んでくれて　黙って来てくれる
辞書に載ってない友情でもいいんじゃない？

もう、このごろ　男を「男性」として見る気がない
女性として　見てもらいたいつて欲もない
干物で結構、面倒くさいんだよね

だから　多分　大林くんと　なんとなく　会えるんだと
思う

そんな　楽しい毎日だったんだけど。
恋愛の神様とは、縁がないと思っていたんだけど。

ショック療法

一人暮らしを始めて 10年近く経つけど、友達を家に呼んだことが無い。

正直、人を自分の家に招くのが嫌だった。

自分の「空間」を 人の目に晒されるのが たまらなく嫌だったのもあるけど、それと並行して、実は超ボロ屋なんだもん。

取り敢えず住めればいいか、と思って 家賃重視で家を選んでしまった。

だから、いつかトラブルがくるだろうなと思ったんだけど。

．．．ついにその日が来てしまった。

仕事から帰ってきた雨の中。階段を登るアパート入口にそれは見えた。

階段を登る中、上の段から つるーっと 水の筋が見えた。

珍しいことじゃない、外から吹き込んできた雨水が 一筋になってるくらいなら。

でもそれは… 私の部屋のドアの隙間から 漏れ出ている

えっ？ 頭の中がフリーズしそうなくらい 考えがまとまらない。

なんで、部屋の床に「小川」が出来ているの？

いろんな仮説を推理するけど、どれが 正解なのか おそろおそろ玄関を開いてみた…

「やだ、雨漏り！うつそー ショック」

天井から 水滴が滴り落ちている。

これが噂の『天井漏水』ってやつ？

屋根が水を通すなんて ホント 奇想天外だわ、思い込みを

通りこしまくり。

一旦 途方にくれてみて、気持ちの整理がついたので まずは
ワサワサ動き出してみた

不動産屋は 時間外なので繋がらず。

漏水被害は ベッド直撃、洗濯物 若干の被害

床は 拭けば大丈夫。

マジでゴザイマスカ…

慌てて 寝具と洗濯物の再洗濯スタート

不動産屋来るまで 最悪 数日掛かるとして… どうやって

やり過ごそうかな

苦肉の策だけど、天井に 防水シート貼って 水を上手い具合に

逃がすしかない

うまくいけば 水を誘導して 好きな位置にバケツ置いては

水を落とすことも出来るかもしれない

希望が見えれば、身体というものは 不思議と軽くなるもので…

私は 「閉店なんて、どうせ 明日（24：00）でしょ」バス
で向かえる郊外のディスカウントスーパーへ駆け込む事にした

買い物を終え、このまま帰宅して 水を逃がすための応急施工を

始めても良かったのだけれど…

自分を奮い立たせたくて　とりあえず　あのバーに立ち寄った

「笑っちゃうわよね」

外には　今でも　辛気くさい舌つたらずの雨が　まだ降っているはずだわ。

心なしか重たいドアを開けたと思ったけど、やっぱりここは　居心地がいい

今、目の前では、マスターが「それは災難でしたね」と　チョコレート削ってココアを作ってくれている。

マスターが「今日は是非これを飲んでください」「とっておきのチョコレートがあるんです」と、こっそり裏メニュー提供をしてくれることになった。

マスターのチョイスは、間違いがない。

これから、差し出されるであろう　極上に甘くほろ苦い優しい味をしたココアが飲めると思うと、話す声が　ちょっとだけ、明るい言葉選びになる。

隣には、互いのケータイ番号すら知らないのに　申し合わせたように　大林くんがいる

職場に帰れば　大林くんのケータイ番号は分かるけど、曲がりなりにも　お客さんだしねえ？

自分の個人ケータイへ入れるのは　手が止まったままだった。

会えなければ、会えないで構わないけど、今日は、会えてラッキー
こちらの勝手なご希望だけど　今日は　会いたかったんだよね

大林くんが「で、ここに　来たんだ」とニヤニヤ笑っている。

ちよっぴり辛口に（人恋しくなっちゃったわけなんだ）と、ほめかすけど、大林くんなら気にしない。

珍しく今日は私服。

「先週の土日、出勤だったから、代休取ったんだ」って、さっき言ってた。

普段、クラシカルなアナログ時計がワイシャツの裾から覗いたりしているのに。

手元には、はずされたアーミー調なデジタル時計が隣にある。

時計をはずしたままで飲んでいるってことは、途中 休憩中か…

長い付き合い？で、それとなく分かってきた 大林くん

頼杖ついて こちらを見ながら 話を聞いてくれる姿だけみると、今日は調子が悪かったのかな？

飲んでるうちに、気持ちが切り替わって また始めるか、それでも冴えないとさつさと帰っちゃう。

今日は、どっちに転ぶのかな、ふふふ

大林くんは、客先の担当者という目を差し引いても、話が分かる人だと思う。

いささか、こちらが緊張してしまうほど、頭がいい。

決断も早いし、何か起きても動じず判断をしてくれる。

こういうとき、いるだけで有難いし、話し相手になってくれるだけで 勝手に「どうすればいいか」自分で閃いていけるから、貴重なのよね。

そして今回も。

「家賃安くて助かってただけだな 引越しかあ」

気持ちに踏ん切りはついたし、夜が明けたら 何をするべきか 分かってきたし。

不動産屋が すぐ来てくれるか分からないけど、ひとまず 交渉し

なきや。

大家に話してくれるんだろうけど、何日も この家に住みたくない事を伝えることと、

その間の家とか家賃とか、引越しするにあたっての、物件の交渉とか。

「そうなんだ」

マスターがつぶやいた。

「一般住宅で雨漏りって 珍しいよね。」

「いやね、雑居ビルとかだと、結構聞くんだよね。」

上が風俗とかエステサロンとかで、水を使いすぎちゃったから、下の階が雨漏りしたっていうのは 聞いたことがあるよ?」

「震災の影響かなあ」

カウンター越しに立ち込めるチョコレートのいい匂い。

「そうかもね」

マスターが微笑む。

「震災の時、生きていて 家も無事だった。…一人でも、悲しい思いをしなかったのは、なよりの話だよ」

「そうそう。そう思えば、そうかもね。」

「今、雨漏りで済んで良かった。次の家に 早く移りなさいってお知らせなのかもしれないね」

ふわふわのミルクがのせられたココアが 「さあどうぞ」「ミントの飾りとともに、手元へ来た。」

今日も、イタダキマス。

ミルクの泡を唇でかき分けながら、甘い香りごと吸い込んだ。添えるようなミントの清涼感が アクセントでいい感じ。

ふたくち、みくち。そのまま 慣れてきたのでゴクリ
飲み進めていくうちに、ぼんやりながらも 気持ちが落ち着いてき
た。

今回の災難は、急遽決まった引越しただけ。

自分の会社は 運送会社だから、引越は若干でも社割は効くし、
最悪 社宅って選択肢もある。

大丈夫、なんとかなる。

「それで、部屋は、どうしてきたの？」

手に持ってきたアイテムを指しながら、応急処置の話をしてみた。

二人の顔は、なんとも読めない顔。

うーん、我ながら ナイスアイデアだと思ったんだけどな。

「女の子の手で、天井に届くかな」「部屋を出るまで不安じゃない
？」

心配してくれているのは嬉しいけど、だからって どうこうしてく
れるわけじゃ…

「大林くん、見に来てあげなよ」マスターの切り出しに

「そうだね、面白そうだから 行く」大林くんが即答する。

あれ。あれ？

男二人の会話は、それが結論かのように定まってしまう。

「これ、飲み干したら行こうか」

いつものレモネードを、カラカラと振りながら喉へ流し込んでいく。
私は、大林くんを 部屋に入れるのが決定事項になってしまった…

きつとね、たぶんね、おそろくね。

マスターは、いい大人だから。

面倒ごとが起きてても、ソフトに和らげてくれる言葉と伝え方を持っている。

きつと、今回だって、悪気なく「女の子なんだから」とか 深い意図があつて、大林くんを差し向けたんだろう。

なんか、大林くんに 申し訳ないというか… 恥ずかしいわね。

いつもは、まあいっつか。で終わるのに、今日はなぜか、なぜか「まあいっつか」が出てこなかった

「散らかってるけど、どうぞ」

前置きもそこそこに、大林くんが 「悪いね」部屋に入ってきた。

入るなり「ありや、ホントに雨漏りだね」そしてすかさず。

「敷金、いくら払ったの？」

天井を眺め、垂れてくる水を、指に絡めながら聞いてくる横顔。

「部屋を出るとしたら、現状復旧の請求がくるでしょ？ 敷金で賄えるといいね」

言われてみればそうだ…

明け渡し前に、掃除もしなきゃならないわね。

ふう。

そう思っても、いま考えることじゃないし。

立っていても仕方なくて、買ってきた防水シートと紐、テープを、買い物袋から広げた。

大林くん、ホント 普段 どんな仕事をしているのかしら。

勤め先は、精密機械部品の保管倉庫って聞いたけど、明らかに手馴れていた。

「見てるだけでいいよ」その宣言通り、みるみると思い描いてた通りの応急処置が施されていく。

全部片付いたのは、23:00回っていた。

これから車で帰るんだろう大林くん。

申し訳なくて、コーヒーを入れて差し出した。

ベランダに足を投げ出して、タバコを吸う大林くん。

「ありがとう」

消して戻ってきたとき、不思議と いつもと違う雰囲気があった。どう違うって… 何がどうって説明できないけど、いつもと違う気がしたの、まとう雰囲気だ。

その直感は、背中がゾワゾワするくらい 間違いのないもので。

大林くんが ついに口を開いたときは、怖いとすら思った

「話が決着するまで、空家賃払うのも シャクだと思っけど、ウチくる？」

姉貴が出ていったから 部屋 空いてるよ」

えっ、と言ったとたん、やっぱり。と思った片隅で、言葉どころか、顔や身体中が詰まった。

だって、オトコの人だよ？ いきなり、ただの友達？ かなにかの私が ルームシェアにいくだなんて。

まして 私は 大林くんの会社では、業者であって、しかも直接の実務担当者。

ようやく搾り出せたのは

「…不動産会社 電話してから考える。」の一言。

これでいい、これが一番無難な答え
「それもそうだね。」

読めない声で大林くんが答える。そして

「あ、ごめん。トイレ借りてもいい？」何事もなかったように 部屋から離れていった

一人残された雨漏りの部屋でおもつこと

「ウチ くる？」なんて、軽い言い方して…どういっつもりだったんだろう。

でも、大林くんのことだし、なぜかどこか憎めない。きっと、悪気はない

だからって、どうなんだろう？

けれどね、

どっかで思ってたの…この間柄って いつまで続くんだろうって。いままで「恋愛」とか「オトコ」とか、意識するのもわずらわしかった。

相手は、大林くんだし、お互い それでいいと思ってた。

どこかで、「世間で言う普通の感覚」に戻る日が 来ても来なくてもどっちでもいいって思ってた

でも、いま。今、突然訪れた。

さっきの一言は、すっごくすっごく 自分が「オンナ」になって、聞いてしまっている

いやだ、この違和感。

私、いまさら急に「普通」になっちゃった。

幸か 不幸か。

ここで始めて

大林くんを

男として意識しはじめた

麻痺が引いた時

家が雨漏りになったアタシに 「ウチくる〜？」

そこで初めて 自分が女で大林くんが男なのを 思い出した
麻痺してたことに 甘えてた

大林くんが、トイレから戻ってきた。
何事もなかったような顔してる。

怖くて聞けない

『私、女なんだけど。』

普通、ルームシェアって、恋人同士だよな？ 同棲だよな？
男女友達同士の同棲って、ありえないよね？

貴方を男だと思ってるんだけど、私のこと、人畜無害な欲情もして
もらえないオンナだと思ってるの？

「答え出た？」

「なにが…？」

喉がカラカラで声が出ない。

緊張で、引きつって なおさら響かない。

「いい きっかけかな と思って、言ってみただけど。…イヤだ
った？」

先ほどからしゃがんだままの私の真正面に、すぐ隣で あぐらを組
む大林くん。

「どうつて…」

返事はしてものの、怖くて聞けない質問を抱えたままの私には、言葉が続かない

心臓が必要以上にバクバクしてる。バクバクが、首とか耳まで響いてしまってるような気分

胸が、喉が締め付けられてるように苦しい

どうしよう、苦しくて 泣くつもりなのに泣きそうになる

「俺と暮らすって ハードルたかい？」

ニコッと笑う。私のこと、落ち着けようとしてる、気を使ってくれてる

「意識はしてくれてるんだ。それ聞けて良かったよ」

胸がグツと苦しい。何かが刺さるように苦しい。

適度に聞き流して欲しいんだけど、と大林くんは 笑って軽く言う
「たまりに シたくなる時あったよ。いつからか その回数が増えてきてね」

大林くんの『シたくなる』の意味が、残念ながら分かってしまう。

もう、30代も中盤。とぼけるフリは 年齢的に出来ない。
どうする？ どうする？ その言葉だけが 頭の中で脈打つドキドキと一緒に プレッシャーを掛けてくる。

大林くんの手が 伸びてきて、距離が近づいた。

「ああ 俺も 『男』に戻ってきたんだね、って思うようになった」
…まだ こないで。とつさに体が身構える。

不思議。

さっきまでは 体が触れ合うかどうかの隣でも、なんの違和感なかったのに、自分の気持ちがこの人を「知らない人」と思おうとしている

「俺たちって、気の置けない友達みたいな感じで　しょっちゅう会ってたでしょ？」

でも、たまにフツと我に返るんだ。…そういえば、たいした付き合いの長さじゃないのに　どうしてこんな？って」

体育すわりで、両腕を抱えて座っていた私。このまま　殻に籠ってしまいたい

「どうせ、この部屋じゃ眠れないでしょ？　今、決めて」

大林くんの手が伸びてきて、そしてそのまま　捕まれようとした。

「このまま、俺の家にくる？」

有無を言わさない迫力…　くる？じゃなくて、くるよね？　念を押すような強くて大きな手のひら

ついに　腕に手が掛かった。

あつ…嫌じゃない…

当たり前のように　ただ触られてるのが　気恥ずかしくも、小さく嬉しい

気恥ずかしくて　逃げたい気持ちもある

でも　本当は　逃げないで　このまま抱き寄せられてもいい
と思ってる

ねえ

私が　無駄に　迷わないように　捕まえ続けて。

勢いに任せて　流れに乗せて。

引き寄せる力に　足が崩れていく

それを呆然と受け止めながら、どこか遠くで　喜んでいる自分がいる

恋愛に直感ってあったんだ

熱くて 心地よくて、このまま もっと抱き寄せて欲しいと思った。
遠慮しなくていい、もっと傍に引き寄せてほしいと思った。

自然と、捕まえてる大林くんの手に自分の手が触りにいこうとして
いる。

本当は 気恥ずかしくて、払い除けたかった。

けど、『今 やったら この手を掴み直すまで どれぐらい
口スしてしまう…?』

今まで 知らなかった自分が 冷静に大胆な行動をとらせている

自分でもまだドキドキしてる

でも ドキドキした音を心地よく聞き流しながら どうすべき
か 分かっている 自分もまたいる

大林くんの顔を、そろりそろりと見上げてみた。

顔は笑ってる、良かった

でも 目だけ笑ってない。

『喰われる!』とっさに思ったけど でも、ね『喰われてもいいか
も!』って思った。

だってこれは『男の顔』。本能の欲が宿った男の顔

このまま、床にでも押し倒されて 胸とかお腹の下とか 見られて
も、捧げても、いいと思った。

頭のどこかで「抱かれる」って意味がリフレインする。

ああ、なんか 久しぶりに 私も「女」に戻ったかも。
きつと『女の顔』してる。

知らずと微笑んでいたらしい

「どうしたの？」って聞かれた。だから、

「いま、『おスケベ』してもいいかもって思った」

「おスケベ、ね」

大林くんが、苦笑する。

なんか 久しぶりに 「女」に戻ったかも。

「おスケベ」してもいいかもって

「おスケベ、ときたか」

大林君が もう一度口にして笑う

そして。

「詩織…」名前を呼ばれたとき もう一度胸が詰まって目をつぶった
それが自然だと思えた

体がゆっくり仰向けに倒されるのが分かる…そして。唇に暖かい感
覚がかぶさって、雨音が聞こえないぐらい体温に包まれた

おぼろげに 大林くんの名前を思い出した
確か『貴^{タカノリ}紀』

クレジットカードのサイン、会社に送られてきたメールの署名、財
布の社員証

意図して覚えたんじゃないくて ずっと一緒にいたから 刷り込
まれるように覚えていた

今の気持ちも 自覚するきっかけを待つように ずっとずっと

埋もれたまま この時を待っていたのかもしれない

「好きだよ、言い忘れてたけど」

「うん。好きかも。聞き忘れてたけど」

腕の中にぎゅっと つよくつよく巻き締められていく
久しぶりに、誰かに髪をなでられる感覚… ふわりと力が抜けて
身体を預ける自分がいる

なんの躊躇いもなく 口から言葉が洩れる

「恋なんて久しぶりなのに、どうすればいいかとか 忘れてなくて
よかった」

タカノリが笑う

「俺も、30越えて、もう一度恋愛できると思わなかった。」

「ヤダ、私 34よ?」

聞こえない…と、タカノリのとぼけた声がして、思わず二人で笑い
あった

互いの心音が落ち着いた時、タカノリが身体を起こした。

「俺の理性が飛ばないうちに、支度して? まずは、貴重品と衣服
だけで十分でしょ?」

そうして、私は 数時間で 次の入居先が決まったのであった…

リハビリラブ

33 過ぎたときに 恋愛なんて諦めた。
もうないと思ってた

でも、貴方に出会って、恋を思い出した。
男の人って 確かに そういう生き物存在してた。
私って、女の人っていう生き物だった。

貴方に出会って それを思い出した。

恋愛なんて、って 軽蔑してたあのころの自分を否定するつもりはないし

それもまた 私の一部で、あの頃の私の中に 今こつやって 恋を謳歌したいと願ってしまう別な私がいる
人生って、自分って、変化って、すつごく不思議。

昼下がりの日曜日。

買い物して帰ってきた時 タカノリが 爪を切っていた
背が高くて 手足も長い スラリとしたタカノリ
床に座り込んで 大きいんだな、と ほほえましくみる

タカノリの職場は 機械部品の保管倉庫らしい

この前 言ってた
こつという仕事してると 爪が伸びるのが速いんだよね
って

私よりも　大きな爪が　小気味良くパチンパチンと切り落とされていく

「どうしたの？　見てて楽しい？」

となりに座った私を　覗き混むようにみるタカノリ
隙がないほど　顔立ちに仕草が整った顔が　不意に　無邪気になる瞬間に　私は結構弱い
いつも　ドキッとしてしまう
キュンとして　しばらく　物思いに囚われてしまう

あのね、その手が　いろんなこと…

マウスをトントンと　軽く落とす動きがきれいとか
紙を丸めたゴミを放る様が　思いきりがいいとか
バーで飲む時のグラスの持ち方が　優雅とか

その…

ベッドで私の奥に触れるのも　同じ指なのかなあって

溜めた息が　素肌の弱いところへ　かかった時の感覚を　ふと思いついて
思い出して。

あ…一瞬　見られたら恥ずかしい顔になってしまった、かも。

爪切りは　まだ　何事もなかったように続いている
長い指が　足の甲を包んで　手際よく進んでいく

「ねえ　何考えてた　さっき」
フフフ、と笑う顔。絶対　気付いてる。

「ナイシヨ」

「ふうん」

知られたくない。知られてもいいけど、恥ずかしいもん。

…指みてて 悶々としかけたなんて。

おもむろに タカノリの顔があがって 目が合う

長い指が 上がってきて、お互いの顔の間で止まった

これではらくは 大丈夫。

独り言のような ちいさな声がして、ね？と 返事と確認を促された

なぜ？

表情で返事した

クスクスと笑うような 緩い表情：

魅入ってたらおもむろに 私の唇に ふわりと 指が押し当て

られて 一言

痛くないでしょ？

リップクリームを 拭う仕草に

キス、してくれるのかな

一瞬の期待が沸く

抱きよせるの？それとも 来てくれるの？

構えていたのに。

ズキーイイイン

耳を塞ぎたくなるくらい　キツい音が　頭の中に響いて
いったーい、悲鳴とともに　デコピンが飛んできたのだと気が付
いた

ハハハハハ　と　タカノリの高笑いが響く

「ウチの職場の人も　毎回　引っ掛かってたよ」

酷い！　雰囲気台無し！

猛抗議を背中で受け流しながら　切り終えた爪を　捨てにいく
タカノリ

デコピンだから　まだ　痛くないと思ったんだけど。
戻ってきて　悪びれずに言う

「タカノリ　性格悪い！　職場でもやってるの？」

「もう　やってないよ」

じつと私をみる
ホント？　うん

「職場の上司が　新婚だね」

戻ってきたタカノリが　私の隣に座る。ふふふ、と笑う顔が　かわ
いい。

「俺より年下なんだけど、いつも『リン兄』って呼ぶんだ」

大林の林を『リン』と読んで　リン兄

「タカノリ、『リン兄』なんだ。」

私の職場で評されるタカノリは、超然としていて　淡々と話を進め

る「読めない切れ者担当者」だけだ。

その電話のむこうでは、イタズラもするし、兄として慕われ？てもいる。

そして、みんなが居ない 本当のプライベートでは、ぼーっとした顔が似合いながらも、ベッドへ昼寝では済まなそうな昼寝を 誘う 健全なメンズだったりする

あなたがもつと知りたくて、言葉が続かないほど たまらなくなる。そして、変わっていく私を もつと知って欲しくて 誘われた手を 重ねたくなる

こんな私じゃなかったのに。

どこかで冷えきって 成長が止まってしまった私なのに
でも、溶けて柔らかくなって 広がっていく私がまた 不思議にいと
おしかったりする。

恋をして 気持ちの中が すっごくピュアになってる今が 実は
気に入っていたりする

在り来たりだけど、これが 世間でいう「イイ恋してる瞬間」かも。
やっと 気持ち が 追いついてきた。

あなたが 追いつかせてくれた

「どうした？」 「なんでもない」 「そっか」

ふたりで 照れくさく笑うのすら 幸せ。

これは そんな私のリハビリラブ

リハビリラブ（後書き）

これで 一旦、一段落ですが、
次回からは、タカノリ視点のストーリーになります。

スミマセン…

まだ続くんですよ

もうひとつのリハビリ ラブ（前書き）

シオリの彼氏となったタカノリ。
ここからは、タカノリ視点の物語。

もっひとつのリハビリ ラブ

「ほーら 言っただでしょ？」

マスターが フフと笑う。

「僕の予想は、予言なんだよ」

マスターが言うのは、今から一年以上前のことだ。

初めてシオリを店に連れて行った後

マスターは、「大林くんは、あの子の事 絶対もつと好きになるよ」と言い切った。

そのとき俺は、さあ どうだろうな と首をかしめるだけの返事をしたただけだったが。

「僕は、嬉しいよ。」

大林くんが、女の子と一緒にの生活を送る気になってくれて」

そうも心から安堵されると、嬉しいが くすぐりたい。

「大林くん、明るくなった。」

シオリのおかげ？ なら、違うと思うが。

「違う、違う。このごろの話」

一昔前の大林くんは、怖い顔してた。と、マスターは笑う。

「そうかも、な」

今度こそ、都合が悪くなった俺は、目の前のカクテルを一気に飲み干した。

「また1杯ほしいな、同じくジンベースで何か、ない？」

今夜は飲んでも問題ない。

彼女が、車で迎えにくるから。

恋愛には、興味がないと駄目なのか？

「不謹慎かもしれないけど、柏木夫妻のおかげなのかもね」

マスターが 今だから言えるけど、と失笑する。

「そう…かも」

俺は、3年位前を思い出し始めた。

「大林って、好きなコとかいないわけ？」

昔から、その質問が一番ウザかった。

自慢じゃないが、10代の頃から、モテる。

大学まで 勉強で苦労したことがない。それなりに成績が良かった。背が高くて 太りにくい。

部活も、早い段階でレギュラーになっていた。

そんな俺は、女の目を引くようだ。

「どうして彼女作らないの？」「好きな人いないの？」探りみたいな質問に晒されることが 年々増えた。

毎回面倒だ。上手くはぐらせられない。どう答えれば、誤魔化せるのか分らない。分からなかった俺は、素っ気無くした。

最初は、硬派とかクールとか もてはやされ、 更に ウザく なってしまった。

が、そのうち、今度は ゲイ志向の噂が流れた。

そうなるも、もう、全てが煩わしくなる。

大いなる誤解だ。

挫折といえば、挫折になるのだろう。

そのうち、俺は、人と付き合いたくなかった。

どうして、俺を「恋愛に興味のない人」と素直に扱わない？

「どんなタイプが好き？」詮索される自体が、気に入らない

頼む。ほっといてくれ…それが、俺だった。

自分でも人を選ぶ俺だが、行き着けのビリヤード場がある

マスターとも懇意なのもあり 五年ぐらい通っている。

職場の同僚「クマ吉」と一杯やりながら打つのが、このごろの趣味だった。

クマ吉は、俺とは正反対の性格だ。

社交的で、基本的に温和。

分け隔てなく優しく、そして タフなクマ吉

腕っ節が強く、酒はザル。

何でもカラッと笑って、どんな面倒ごと引き受けてくれる気前の良さが頼もしい。

唯一、騙された気がするのは、いつまでも老けて見えない童顔。

深く付き合えば分かるが、気概は、珍しいぐらい男前。

絵に描いたようないい奴だが、今日のクマ吉は、浮かない顔をしていた。

「これで良かったんだ」

クマ吉が失恋した。

相手は、俺たちの上司。

ちよつと名の知れた精密機械メーカーのグループ商社で 俺たちは働いている。

ただ…

俺たちは、正社員じゃない。

その保管倉庫のパート。

数字と記憶力が強い俺。

チームワークを支えるのが上手いクマ吉。

俺たちは、入った頃から 出来が良かった。

時間をかけずに、ヒラからパートのリーダーに上がり、数年後、契約社員になった。

それでも 所詮、契約社員どまり。

クマ吉が 好きになったのは、俺たちを雇用する正社員の女の子。だが、最後まで告白できることなく、その子は、本社の男と結婚してしまった。

「クマ吉？」

「ん？」

上の空の返事が痛々しい…お前。
無理して、明るい顔するな。

クマ吉が 彼女を好きだったのは 前から知ってた
多分 皆 知ってた

それが 本物の気持ちだったのも。

現に、彼女が頼むことは 絶対 断らなかった。
下心を通り越して、多分 本当に尽くしていた。

確かに、それ程のいい子なのは俺も認める。

可愛いし、細かい仕事にも一途だ。

なによりも、パートの俺たちを 大事にしてくれた。

周囲の反対を押し切り、契約社員まで上げてくれたのは、彼女だった。

クマ吉が「心意気に応えたい」ほれ込むのも 理解は出来る

なのに 彼女は 常に、自分の立場と仕事で手一杯で。

クマ吉の行為を、ただの忠誠心みたいな気持ちで受け取ってた。

それよりも なによりも。

クマ吉が 一番躊躇した理由がある。

それは、当時の俺たちは、身分保障のない契約社員だった。

契約社員の身分で、正社員の彼女へ気持ちを伝える…

30を越えた男だったら、出来ない話だ。

クマ吉は 「俺が言わなかったのが悪い」「これは、エゴだから」と笑った

そして その先も 一生伝えないのだろう

それだけに、俺は、お前を責められない

そこから数カ月後。

俺たちは、正社員へ昇格した。
皮肉にも、俺たちの正社員昇格の稟議を通しきってくれたのは、彼女のだんなだった。

本社の秘書課のチーフ。

その役職が、どれだけの権限を持つかわからないが「嫁から相談されてね」稟議を押し通したそうさ。

ただ、この人事にもオチはあった。

俺たちの物流センターは、コスト削減のターゲットにされていた。二人同時の正社員稟議は通せない。

それを無理やり通すため、クマ吉は、違う部署へ引き取られた。

「俺が責任持つ。秘書課に來い」

クマ吉にとっては、恋敵が。

俺は、居たまれなかったが、クマ吉は、話を受けた。

奴が何をどう思ったか。いまでも、俺は知らない。

ただ。

奴は、ニコツと笑った。

「俺、たぶん 貴方より出世しますよ？ それでもいい？」

その瞬間、ゾクとした。笑った顔の穏やかさが 逆に怖かった。クマ吉とは付き合いが長い。奴には、本当に勝算があるんだろう……小細工に頼らずとも、勝負できる確信を持ってる、と感じた。

これは、恋の恨みなのか、よき反動なのか？

失恋から短期間で立ち直った上に、ますます強くなったお前が……

俺は、羨ましい

そう

羨ましかった。

もし、俺がそこまで誰かを好きになり、変わっていける未来。
そんなものは、期待していなかった、全く。

たまたま 性別が女、なだけだ。

クマ吉が本社へ行き、俺は 現場に残った。

当時、会社の方針が大きく転換した。

簡単に言えば、関連会社がいろいろと合併した。

俺がいた建物もまた、こまごまとした関連会社の物流部隊を吸収。何かとせわしない毎日だ。

ここで今クマ吉を、本社に獲られたのは痛手だった。仕事のにも、個人的にも。

昔は、気兼ねなく「今日、どう？」誘えた。

が、今は勤務地がまったく違う。

遊び相手でもあった奴が いないのは 何かと苦しい。

そんな頃だった。

店へ ちよつといい感じな取引先の女の子を連れていった

「いい感じ」というのは、「タイプ」「好み」とかの「気になる子の類じゃない。

いいな、と思ったのは、全てにソツがなく、賢い子だから。

地味だけど 自然体で全てがさりげない

精神的にも 落ち着いてるいい子だ、と思う。

クマ吉と似てるようで、すこし タイプが違う。

だが、俺が 仕事抜きで会話してもいいな、とおもった貴重な人間だ。

話しているうちに、もしかしたら？と 軽い気持ちで誘ってみた。

それから数日後。連れていった後日に、俺自身が一人で店へ行つたときだ。

マスターが 聞いてきた。

「大林くん、あの子 どういう繋がりなの？」

何って… 仕事上の「業者」だよ

「いい子じゃん」

だろ？

一言でいうなら「気が利く」

常に こちらを読んで 先回りの会話をしてくれる

差し出がましくない程度なのが、なお いい

俺が言いたい「賢い」、とは このことだ

会話に華はないが、その匙加減が分かっている

元から 平均的に能力が 高いのだろう

辛辣だが、あそこの会社の営業担当より使える。

俺は あくまで 「デキた人間」を店と引き合わせて、「顧客」

を増やしてあげただけのつもりだったが。

マスターは 含み笑いを絶さない

「嬉しいなあ、大林くんが 女の子と一緒にくるなんて」

俺だって まったく女に興味がないわけじゃない。

ただ、その先のお話は 誰とも沸かないだけだ。

正直なところ、連れてくるのは、男でも別に良かった。

所詮、ビリヤードの対戦相手だろ？

たまたま、相手の性別が女だったただけだ。

そもそも、俺自身が「女」を求めてない。

あの子も「女」を匂わせない雰囲気がある

だから、俺には 付き合いやすくて、連れて行った

なのに、今夜は マスターの調子がおかしい

「大林くん、あの子の事 絶対もつと好きになるよ」

ご信託めいた断言に、さあ どうだろうな と首をかしめるだ

けの返事をし 俺は 手元の飲み物を飲んだ

「『あの娘』って…」

そういえば、名前を覚えていなかった。

牧瀬詩織とかいて、まきせ しおり

勤めているところは知っているし、仕事も知ってる…俺の勤め先の
業者だからな。

ただ、知っているのは そこまでだ。

年も、連絡先も、知らない。

牧瀬さんとは、発注依頼をだしているのがきっかけで 世間話も

するようになった。

会話の中で「職場関係の人と オシャレなお店で 仕事帰りに
飲んでいく」ライフスタイルに 憧れると言っていた。

確かに、この業界にいと、帰りがけに一杯という習慣がない

飲酒で免停は、一番笑えない

憧れる気持ちも分かる。だから、連れてきたただけだ。

「この前　一人で飲みに来たよ」
ふうん

「紹介した甲斐があるよ、良かった」
会話は返したのに　マスターは　まだ何か言いたげだ

「一人で練習してた。」
へえ、それは　面白いな

グラスを揺らして、音を楽しみながら　また　喉を潤す
それを見た　マスターは、やれやれ　という渋く笑う顔を隠さない。

「気に　ならないんだ？」
何が？

「彼氏がいるのかとか、一人にして悪いなとか」

「生憎ね」

彼氏がいるなら、彼氏と練習すればいい。

一人でくるなら　居ないのだろう

俺が誘って、それで来たというのは　定まった男が居ないのか、
気にしない男が相手か。

ああそうか、彼氏いないかもな

居てもおかしくないが　思うところがある部分に　一人納得を
する俺

一人、合点していると　マスターの視線が、また刺さった。
言いたいことは分かる。

だが、ご期待に添えなく残念だが「誰かとどうこうなりたい」とか

俺が望んでいない

それに、牧瀬さん自身もまた　望んでないだろう。
お互い、そういう気がないから　あの日が成り立った

マスターは 先ほどの含み笑いを続けながら言った

「基礎だけでも 教えてあげて。」

きちんと教えてあげれば 後は 自分で上達するだろう

から」

大林くん、連れてくるだけ連れてきて 放置するのは 冷たい

よ。

なじるマスターの視線が 真綿で絞められるように痛かった。
それも一理あるかもしれない。

…分かった、と 呟いて 今日何度目かの飲み方… その場を
誤魔化すように ドリンクを口元へ流し込んだ。

何が分かったかは、とても 言えたものじゃなかったが。

絵として浮かぶもの

マスターから「大林くん、連れてくるだけ連れてきて 放置つてのは 冷たいよ。」と諭され
正直、気分が重たくなつた。

個人的な連絡先も知らない相手に、義務か指令のようなものを背負つた気がしたが……

幸い、あまり 間を置かずに 彼女とは会えた。

店のカウンターに腰を落ち着けた頃には、彼女とマスターがすでに盛り上がっていた。

「シオリちゃん。何回か、コソ練にきてたんだよ」
と マスターが暴露すると

「それを言ったら コソ練にならないじゃない！」
彼女が 笑う

すっかり 馴染み客みたいな雰囲気 温かくていい
この子のいい所は 変に気後れしないで 自然体で馴染むところだろう

場慣れしている、とは違う。その場に溶け込めるだけの落ち着きが、元から備わってる

「俺も コソ練しにきてるから 大丈夫だよ」

「そうなんですか？」

ああ、と返す

「一緒に遊んでた奴が 異動しちゃってね。 たまにしか会わなくなっただけだ」

マスターが横から口を挟む

「クマ吉のことだね」

そう。

「強いんだ、その男。」

マスターが 同意するように頷く

「ミスが少ない。追い詰めても、動じないから 相手にすると 気持ち悪い」

見た目は マスコットのクマみたいな童顔男。

そのくせ、攻めも守りも 確実に押し出してくる。

「この俺が、ついに コソ練する必要になってきたわけよ」

傲慢なんだか、自嘲なんだか 笑う顔で 牧瀬さんをみると、つられたのか 笑ってくれた

そうなんだよ

クマ吉相手に、簡単に負けたこともないが、快勝したことも ない。

奴は 本社へ異動してからも 近場で練習しているらしい

禍根がない訳でもないだろうに、例の元恋敵 兼 今の上司 と練習してるという

… 柏木さんも 巧いらしいからな…

俺は俺で 練習させてもらおう

「じゃあ 始めようか？」

普段の仕事ぶりでも思った通り 牧瀬サンは 飲み込みが早かった
一を教えれば十を知るとはこのことで。

加えて、気持ちにムラがなく 成功率が常に 安定している。

女とは もっと 感情主体な生き物だと思ってた

一時は 抑えていられたとしても、ふとした瞬間に 破裂するとたんに 喧しくなり、捲し立てる生き物、煩わしい存在だと。

牧瀬さんだと、そこがない。付き合いやすい。ゲーム中も 常に淡々としている。

自分に都合の悪い展開になったとしても 見苦しい言い様をすることもない。

上手くなってくれば いい対戦相手になるかしれない。

3ヶ月もたつ頃には、一通りの打ち方を覚え こちらが驚くほど巧くなってきた

自分でも 面白いと思うようになったらしい。

いろんな戦法を試しては、「うーん」や「やった」を繰り返して… 楽しそうだ。

あまり表情が大きく出ない彼女だ。

ふいに、無邪気に嬉しそうな顔をする姿を みるのは、気持ちがいい。

不意打ちに笑う顔を見れると ラッキーと思える

いつしか俺は、会社を出る前に、月間の出荷オーダーを確認するのが習慣になった。

出荷オーダーが多い日は、牧瀬さんの会社へ依頼を多く出すことになる。

つまり お互いが忙しいという意味。

依頼書の枚数が少ない日を決め打ちして「来週の 曜日あたり、予定、空いてたらやらない？」誘う

暇なのか、好きなのか。ほとんど 断られたことはない。

マスターが作るカクテルが、気に入ったのも、ひとつあるだろう。

「マスターの仕事を見ているのが好きなの」「飲み物も 料理するものなんだなーって思える」
怖いくらい の視線で見ている

俺が遅れてきたときは、マスターと話している。

牧瀬さんが遅れてきたときは、準備運動 兼 手慣らしで打ち始めている。

互いが 無理をすることなく会えてるのが、いい。

今月も、ウチの出荷計画が更新されて。店で会った誘った時に、次回を誘った。

が、今夜、当日になって「済みません、ハマりそうです。間に合いません」これなかった

俺の会社以外にも、荷主を担当しているとは聞いている。

まあ、そういう日もあるだろう。

気にせず「一人で練習するか…」店に向かい、マスターに挨拶したときだった。

「あれ？ 一緒じゃないんだ？」

反応に困る。そんなに、意外そうな顔をされるとは思わなかった。こういう顔をしていいか分からず、戸惑う自分がいる。

彼女とは、店のカウンターで待ち合わせてる

いつも 一緒に入るとは、無かった…が？

一緒にいる予定がある日とない日

俺は　そんなに　態度が変わるのだろうか？
今日は、店に入るなり、そさくさと　飲み物を口にして　道
具に手をとったから？

「シオリちゃん、急用？」

ああまあ…　そんなところだろう

「深くは聞いてない。ハマったとは聞いた」

ふーんと　マスターが返事をする

「取引先同士だっけ？　仲、いいよね」

そう言われてみれば、世間的には　そうなるのだろう

「たまたま　だろ？」

「たまたま、なんだ」

クマ吉が　一緒に働いていたときは、奴が　配送の出入り業者と飲
みに行くのを見掛けたし

俺たちの上司も　顔を出しに来たりリース会社の営業と昼ごはんを
食べに行っていた

…珍しい、のか？

「一人でも　来たいときは来るさ」

子供じゃない

もともと　一人で練習するときもあるしな

「そうなんだ」

マスターがまた返事をした

言われてみれば、久しぶりに　一人で打つ気がする

今日は　珍しく客が少ない店内。自分のかもす音しか聞こえない。
いつもは、馴染みの一人客が隣り合ったりすると、それとなく
マスターが　引き合わせて　対戦させたりと気を回してくれる

今夜は　その相手すらいらない、深閑とした静けさ。

一種、仏閣に漂うような整然とした空気が好きだった、が。

今は　静か過ぎるだけに、気が散って　思ふような展開に出来ない。

…折角　好きに練習出来る夜なのに。

気分に合わせて自主練習のメニューも　生憎まとまらず、目的もない時間が　緩慢と過ぎていった

「（マスターが　変なこというからだ）」

あのは結局、どう　気持ちを切り替えていいか分からないままだった。

「こんな日もあるのかもしれない」と、店を出てきて　今に至る生暖かい自宅のシャワーに当たりながら、ままならない思考をまとめようとする

「取引先同士だっけ？　仲、いいよね」

マスターの一言が、ちくりと刺さったのが　きっかけだった。

だが　そもそも、この一言に、マスターが何かを含ませていたか？　まさか。

何の気のない一言に、俺が　過剰反応しているだけだろう、勝手に。

はは。と、乾いた笑いが出た。まるで　俺らしくない。

これではまるで、高校生の合宿の夜の会話だ。

指摘されて、上手く切り返せなくて　ワタワタしているだけだ。

確かに、日ごろから人の機微には鋭いマスターのいうことだ。

それは、俺も　一目置いている。それが、俺自身に向いただけに、

動揺しているだけだ。

掛け流し状態のシャワーの音を聞きながら 目をつむる。

あの時「仲がいい」その一言に 嬉しくなった。

嫌、ではない。

今の気分は、自分の気持ちの置き所に困るくらい…若干 嫌だが、これとは無関係だ。

牧瀬サンは、いい子だ。それは思う。

だが、世間が期待するような…その先の姿は 自分の中で、絵的に浮かんでくるものじゃない

なら 何で俺は 動揺したのか？

「駄目だ、今 考えても答えは出ない」

結局、俺は 身体の水気を払うと、早々に布団へ寝転んだ

寝て、目が覚めたときは 「動揺した」ことすら忘れていた。

翌日、牧瀬さんから「昨日は」と改めて連絡がくるまで、思い出もしなかった

所詮そんなものだ。 自分に笑ってしまった。

今の俺に、次の姿が 絵として浮かぶわけがない。

浮かぶ日がもしくれば、そのときまた…考えればいい。

ただ 着実に ゆっくりと、「絵」の存在を意識するようには

…
なっ
て
い
た。

いつか シェルターを出る日

程よく遊びつかれ、なんとなく時間が過ぎる。

場が緩んできた後に飲む締めめの1杯の時だった

「この業界にいると…」

今日は、珍しく 仕事の話がでた。

「クリスマスと花見は、できないよね」

この業界にいれば、意味が分かる一言だ。

年末は、最近は減ったが、お歳暮繁忙期。

3月は、年度末繁忙期。

「お歳暮の時期って、クリスマスと重なるから」

彼女が 少し遠い目をした

「通販会社が荷主にいると 特に ハマるのよね」

そうかもしれない

クリスマスは 遊ぶものじゃない。稼ぐものだ。

味気ない、なんていつてる暇もないほど、忙しい。

考え直せば、クリスマスから 一週間頑張れば、年が明ける

この時期の基本は「子持ちと新婚以外は 強制残業。」

そうかも、と 互いに笑った

なお 特にひどいのは、3月繁忙期だ。

「毎年、4月は、抜け殻になってるから 花見をする気力がないの」
夜桜でも見ようと、公園へ行こうと思うでしょ？ ライトアップす

ら消えてるのよ。

ふふ、っと寂しそうに笑う。

残念ながら、気持ちは分かる。それを言われると、辛い。

牧瀬さんのトコの荷主としては、といいかけて 引つ込めた

「八重桜の散り際のアたりで、ようやく 落ち着かないか？」

そうそう。と、グラスの腹を撫ぜながら、彼女がいう

「八重桜が、春の通り雨で 重たく濡れてる姿とか…毎年、そのあたりで、思い出が残り始めるのよね」

関東は、4月の上旬には満開を迎え、首都圏の桜は、そのまま1週間足らずで散ってしまう。

繁忙期、終わった…と 気の抜けた朝を迎え、そのまま惰性で夕日を見る時間を過ごす毎日

それが抜ける頃には、ゴールデンウィークになっている。

残念だが、この業界はそういう業界だ。

今度は 俺が話始めた

「ウチの職場。ある年、意地になってね。

ちよっと引つ込んだ人里まで車を出して 花見兼バーベキュー大会をやったんだ」

そしたら？ 彼女の顔が 咲いた

「まだ寒いんだよね、人里自体が。」

日が陰るのは早いし、雲と風が流れるのも早い。

「桜吹雪は きれいだったけど、焼肉のタレに花びら入ったり、紙皿は ひっくり返るし。」

近隣のピザ屋・すし屋・ラーメン屋に みんなで同時に注文して、

どこの店が配達早いかトトカルチョ。
それは途中までは、盛り上がった

ただ。

人里すぎて、迷子になりやがって。「やばい、腹へった」男たちが
殺気立ち始めたという顛末

「面白かったよ、ホント」

さすがに、「来年もやろうね」の声は出なかったが、「ウチら、が
んばったよね」で 後々まで盛り上がった話だ

「いいなあ」

彼女が うらやましそうに笑う

それにつられ、こいよ。と言いかけそうになった

いや、言えば「お世話になっている業者」として ウチの人間は

普通に受け入れるだろう。

むしろ、支障は ない気がする。

子供を連れてきた人、奥さんを連れてきた人、誰が誰の連れなのか
分からないほど 入り混じっていた

どこの誰とも気にせず 笑いあい 場を楽しむ

盛り上げ役がいて 世話役がいて 心置きなく笑う人にまた

笑う顔が増える

その和の中に 彼女がいたら？

不自然じゃない、むしろ 似合う

今のように、さりげなく会話しながら そつなく 手伝いをし
て でも、立場は分かっている

…！

不意に 肘につっぱりを 感じた

「ねえ？」

袖を引っ張り 彼女が 呼び掛けてきた

「？」

目が合った時は 助けを求めてきてるような顔

「悪い、どうした？」

平静な顔で返したが、内心は 一人 妄想していた…目の前の
女の子で。

我に返りながら、聞く

気持ちのなかでは、困惑一色だ。

恥ずかしかったのと、一瞬 心の底で 困った

じっと自分が見つめられてる

これが噂の『上目遣い』という奴か

身長差は仕方ない。ただ 今も続く上目遣いに 困らされてしま
う。

本人は 意図してないのか、

「ケータイ、鳴っていませんか？」

まだなお 俺を見続ける。

「ああ…」

パイプにしていたから 気が付かなかった。
胸元で着信ランプが瞬いてる。

「さっきも鳴ってませんでした？」

「はい 大林です」

電話の相手は 上司だった。

大した用どころか、とんでもない連絡だ。かなりの緊急の相談だったが：

「分かった」 こつちでなんとかするわ」 「退社後に電話してゴメンね」と、話がついた時は 話の半分は忘れた

「終わった？」

その顔に 息が詰まる。

だが、とめたままの息を開放したとき、それは、ひどく 居心地がよかった。

分かった気がする…なぜ息が詰まったか。

「会社、ですよね？」

大丈夫ですか？ と 今度は 怪訝な顔に変わる彼女

「上司が 自分で、なんとかするって。」

大丈夫だ、と答える

「そ、う」

緩んだ互いの間の空気。

あたかも いつも感じている「日常」へと戻っていく

それが 肌で分かる

あらゆる温度がいい、変わり方がいい。

彼女と「二人」でいる間にたゆたう空気は、いつも自然だ。

…たまらなくいいな… しばらく、楽しんでいたくなる。

上司とかは、俺という個人へ用があつて「見据えて」くる
彼女だけは、俺という個人と用があつて「みつめて」くる
息も止まるわけだ。

店を出れば、また「俺たち」は、「客」と「業者」に戻る。知らない人間がみたら、別れ際の恋人同士に見えるだろう。

けど いまのところは お互い 練習相手 気の合う付き合い ぐらいの間柄だ

俺自身、「彼女」「恋人」「好きな人」というモノに まだ気持ち が構えてしまってる。

「絵」は浮かぶが、踏み出す気には なっていない

言い訳かもしれないが… 30越えた男には、余計な心配をする必要 が出てくる

俺は、遅ればせながら 正社員の身分を獲得した ようやく、社会的な面も充実してきた。

今このタイミングで 面倒事は 増やしたくない

そもそも 世間の「恋人像」自体が 余計な世話だ。

ここは、都合のいいシエルター

俺が、甘い面倒事へ 取り組めるまで 隔離してくれる

我ながら 悠長に構えていると思う。今の牧瀬サンに 男がいる とも思えないからだ。

彼女には、考える中に「男を頼る」という選択肢が常にない。

並の神経の男なら、立場がない。居ても続かないだろう

もしかしたら、すでに 世間の男に幻滅しているのも考えられる だから、そんなに 排他的な雰囲気の時折みえるのか…

俺は、女に頼られるのも嫌いではないが、黙って応援もできるタイプだ

甘えられるのは、好かないが、頼られるなら 受けてもいい

だから 多分 俺とも会話が続くのだろう

まあいい。

しばらく、お互い 都合よくシエルターにしよう

いつかシエルターを出る日があれば、その日はその日だ

直球を突きつけられ（前書き）

ちよつとお下品な話が混じっています。微量にはしましたが…
嫌
な思いさせたら済みません

直球を突きつけられ

ふと 目が覚めた時、どこかで 集まる子どもの声がした。
ラジオニュースが終わり、国民的な有名曲が流れた

「子供は 夏休みか…」

不意に 起こして貰えたのは 有り難かった。
が、いい寝起きとは 言えない朝だった

フワフワとする身体、その癖、意識は 過敏に鋭くて。
裸眼ではぼやける視界へ 枕元の眼鏡で 輪郭を捉える

(…うつ！)

腰が抜けたように 力が入らない

体調不良ではない。むしろ 男としては 極めて正常。
下腹部の更に下が… 変に熱い

「(…妙な夢だった…)」

出社には まだ十分に時間がある
歩きながら、Ｔシャツを脱ぎ捨て、風呂場へ向かった

「(寝具ともども 今日 洗濯だな…)」
まずは 凜と冷えた水を 真っ向から浴びた。
身体の中で淀んでいたまどろみが 洗い流され、感覚は ようやく
戻った

髪をタオルで拭いつつ、身体の水滴を払う。

「今日の1便は、朝礼直後か…」

記憶をたぐり 仕事のスケジュールを確かめた
時間的に のんびりした出社は出来ない。

乱暴に 洗濯物を 機械へ放り込むと すぐに スイッチを押した

「リン兄、おはよう！」

うちの上司は 朝が強い。しかも、声が大きい。

毎朝 「おっはよう！」と 色んな人へ声を掛けて歩いている
その声で いま どこにいるのか、場所すら特定できるぐらいだ。

「リン兄、どうした？」

いや…

「気のせいなら いいけど」

そして 時おり とんでもなく 勘が鋭い。

自分自身への視線にはニブくて、行き当たりばったりで、ドジも踏
むし、騒ぎも起こす

だが、たまに 人に対しては、ギクリとするような事を 直球で言
い当てる

動物の勘に近い。よく見ている

「リン兄、昨日 ちゃんと眠れた？」

今回も図星の一言なのは、女の勘か…？ 思わず 手が延びる

「いつ、いったー！」

チョップを見舞ってやった。安心しろ、爪はたててない

組織図上は 上司

だが、彼女の入社以来 センターの基本を教えたのは 俺だ
二人になると、「蕃昌」と呼び捨てをしている

蕃昌は、今は結婚して「柏木」だが、「呼びづらい」と言ったら「
旧姓のままでいい」と笑ってくれた

周りで パートたちが 口許を隠しながら笑っている
今日も センターは いつも通りのスタートを切った

「リン兄、朝から悪いんだけど 急いで、TSTへ行ってきてくれ
る？」

担当は、牧瀬さん。事務の女の子よ」

朝の夢の相手の名が、いとも簡単に出る。何も知るよしもない目の
前の蕃昌。

「本社物流部に、経理監査が入った。業者の契約管理台帳に、TS
Tが載ってないが分かってね」

眉間を いったいいと摩りながら、口ごもる声でいう。

契約書・見積書原本を 急いで回収してきてほしい。 昨日の時点
で、連絡はしてあるから。それが要件だった

本音を言うと、今日の今日は、会いつらい。

ただ、私情をこんなところでいう訳にいかない。

胸元がざわざわと 騒がしく感じるまま、わかった。と返事をした。
一瞬、脳裏の奥で 今朝の夢が掠めないでもないが、頭から追い払
わなければ、なし崩しになってしまう

「リン兄？」

残念ながら、蕃昌の警戒センサーに触れてしまったらしい

「大丈夫だ、行ってくる」

牧瀬さんの会社に着いたのは、昼も意識する、午前中も遅めの時間帯だった。

すぐさま 応接室に通され、担当の営業が書類を持ってきた。

牧瀬さんが出てこなかった。まずは、安堵しつつ「悪かったな。手間掛けて」と目の前の営業へ詫びた。

いえ、そんな！ と、無駄に恐縮する男を無視して話を続けた。

「ウチから連絡が行っているかとは思うけど、内容を確認させてもらうよ？」

基本契約書、見積書一式。

頼んではいなかった物も同封されていた。

規約同意書と作業仕様書が添付されていたのは、手際が良かったこれは、ペナルティ時の損害賠償額を決める場合、ひとつの指針になる。

「気が利くね」素直に褒めると、あ、はい。と生返事が帰ってきた。

「牧瀬さんによろしく伝えておいて」

どうせ、作ったのは 彼女だろう。

出されたアイスコーヒーも、営業はミルクと砂糖がそれぞれ出されていたが、俺の方は、砂糖が2本のみ。

彼女は、俺が甘党なのを知っている。

用事は済んだが、荷主としては、実際に配送で使われるTSTの常駐車両を見ておきたいのもあった。

「時間的に、出払ってと思うけど 同系車両を見せてくれる？」

職場のドンが言っていた。「車が小汚ねえ運送屋は いい仕事出来ねえ」と。

これは、指示を守った抜き打ちチェックみたいなものだ。相手の男が、意図を図りかねるのか、相変わらず怯えたままの顔に、ふっと笑っただが。

「今、早朝便が帰ってきてる頃なので、ホームへ行けば 見れると思います」
だが。

運行中の現役車両が着く場所は、他の荷主との規約上、関係者以外入館できないフロアだという。

「マスターカードがあれば、通るだけは出来るんですが」
あいにく、営業には渡されていないそうだ。

「取ってきていいですか？」と聞かれたので、「俺も 一本電話させてもらうよ」と 二人とも面談ブースを出た。

電波の強いところを求めて、知らぬ会社をさまよう。
牧瀬さんに 会いたいような、会いたくないような…。ビミョウな心境のまま、たどり着いたのは トイレと併設された給湯室の前だった。

給湯室の電気が消えているのに、足元に人がいるのでハツとした。
女子事務員が、床を拭いていた。雑巾で、丁寧に。

こ洒落たかんざしで留められた長い髪、後れ毛が色つぽい
胸元が覗けて、色まで見えた。そして、スカートからの脚も。
男としては ラッキーと思ったが… 相手が顔を上げる前に 目が
あってしまったのは、気まずい。顔だけ一瞬みて 静かに、立ち去る

うとしたが。

（嘘だろ）

ゆっくり 首をそむけた。相手は： 今朝の夢の張本人。
また静かに熱帯びた身体を意識した。

ゆっくりとその場を後にしようと思った矢先、無邪気な声で 我に返った。

「： いたいた、大林さん！！」

このバ力野郎。そんな大声で俺を呼ぶな。

俺が ここにいるのを、知られるわけにはいかない。

だが、こちらの心の罵りを知るわけもなく、疑うことをしらぬ表情のまま「どうしたんですか？」と聞かれた

「ああ、悪い悪い」

男の矜持として本当に悟られる訳にはいかない。まだ用を足せてない旨を伝えて 営業と一旦離れた

「参った」

おかしい。

やはり今日は、朝から どこかおかしい。

こうもあつさりと 中高生のような状態に追い込まれるなど、普段では考えられない

一瞬しか見ていないだけに、鮮やかに記憶から呼び出せる。
記憶が自分を惹きつけてやまない。たまらない。

こつも いきなり自分が変わってしまった
いや、もう どこかで少しずつ変わっていたのを、無意識に 押さ
え込んでいただけだ

素直だったのは、身体で、遂に 訴え出てきた
仕方ないが 腹を括るとしよう…

俺は どうやら 牧瀬さんが好きらしい。
夢にまで現れ、シたいと思うほど。

一人の夜に思うこと

静かで 穏やかな 夜のことだった

カラカラ…自宅のベランダの戸を開けた

途端、空気の塊が ゆるやかに部屋へ 運ばれてくる

嗚呼、今夜も いい風が吹いている…

湯上がりの肌を風にさらし、柱へもたれた

風呂上がりには ベランダで涼むのが 昔から好きだった

けれど、女家族たちは 何かと嫌がっていたのを 思い出す。

近所の目とか、目に毒とか。好きに言われたのを思い出して ふと 忍び笑いが込み上げた

あれから 両親は 「余生は田舎で」と 帰っていき、姉と
借りて住む今のアパートは 切り出した姉自身が 転勤だとかで
出ていった

部屋からは何の物音もしない
いつもの夜、静かすぎる夜

プシュ

ブルトップを押すと 空気が切り出したいいい音が響く

「…今日ぐらい いいだろ…」

酒は強いが、強すぎるので なかなか酔えない

なので あまり普段から飲まないようにしているが、今日は
なんとなく飲みたかった

「（牧瀬さんって、酒、強いのかな）」

どこともなく 思考が始まる
そういえば 一緒に飲んだ事がない
「（ほろ酔いになって、緩んだ顔とか みたい…）」
いつの間にか、自分の顔が 緩んでは 優しい気持ちになっ
ていた

告白しようと思った夜に悪酔いして 逆に 介抱された男を
知っている
言おう言おうとして 逆に 先手打たれてしまった男も知って
いる

二人ともいいヤツだけど…ああは なりたくないよな…
当時の状況を話す当事者たちの苦笑いがよぎった
二人とも その恋は実り、一人は結婚。もう一人も 順調な
スタートを切ったという。
それぞれの顔が浮かび いつしか 俺にも 伝染している

煽られた覚えはないが「一緒にいたい」素朴にそう思える相手が
俺にも出来た
少し 久しぶりすぎて 驚いたけど。
「（俺は きちんと 自分の言葉で伝えたい。）」

若干 多目に喉へ送り込んだビールが 一気に下りていく
吐き出した息が 暗闇へ溶けていった

向こうは… 牧瀬さんは まだ「無自覚」だろう

「男」として 意識されてるのか：から、疑わしい、正直。
でも、好きか嫌いか聞かれたら、好きの部類と答えるだろう
と
は 思ってる。

ぼちぼち 動いても いい気はする。

吐く息に任せて、空を見上げると その先には 雲一つない

「星が綺麗だ」

腰掛けて 見上げたまま、壁に持たれた

幸い この微妙な間柄を察しているのは マスターぐらいな
ものだろう

互いの職場の聡い人間なら 察してるかもしれない

俺の職場は 何がどうとは 言ってこないが：

「（むしろ 丁度いい）」

ふと 独り言が浮かんた

これは 昔の記憶だ。

気に入った子が出来たり、逆に 誰かに気に入られたりした時。

これが 何かと 面倒だった。

要らぬ外野 野次馬 に 妙な膳立てをされるのが 好
かない。

毎回、女の子が 引くに引けない顔で俺の前にたつのを見てき
た。

それが 一番 嫌だった。

背後に、友人一同とかが見え隠れしている
追いたてられられる様に、けしかける様に、人をそそのかし、その

実 経過と結果だけを 楽しんでいる
その他人事の様が 気に入らない

相手の女の子にも 正直 同情はした。
自分に気持ちがないだけに、口には出せなかったが。

今回は それがない
静かに ひっそりと 気持ちを味わえるのがいい

もし、このまま。

俺のタイミングで 俺の言葉で 俺の意思を伝えたら、どんな
顔をされるだろう

本当の正念場は そこからだけれど 時間はたくさんある
つまらぬ 外野はいない。

彼女とは 徐々に 様子見と軌道修正をすれば いいだけだ
よく転んでも 悪く転んでも お互い大人だ。
最悪は転ばまい

少し、うとうと したようだった。いつの間にか 髪が乾いてい
た。

どのくらい 寝てしまったのか… 幸せな気分で目が覚めたものの、
何だか 物足りない。

遠くで 充電中のケータイが 瞬いている
鳴ったのも 気が付かなかった。

いつもは 職場か家族出ない限りは、翌朝にするが 今日は

開いた

「急ぎでもないんだけどな…」

メールが一通

店のマスターからだった

とっておきのチョコレートが手に入った

なかなかのモノだから、近いうちにおいで

ふっ と笑う自分がいる

「了解」

その返信を打ち、いい音をさせて ケータイを閉じた

夜に 人恋しいと思うのも、久しぶりな気がする

何がきっかけで 自分が変わってしまったのかすら 覚えてい

ないが、人としては これが 正常なのだろう

素直に思う、一緒にいたい。と

好きだから 一緒に過ごしたい

ひどく 俺自身が 変わってしまった気がするが、今は 自然
な事に思えるのだから 仕方ない。

物思いも経て また見上げた空は、星座の位置が 少し 変
わっていた

いい加減…寝るか…

戸を締め、カーテンを引きながら 念じた

「おやすみ」という 言葉とともに 自分がおもう相手と 例
のチヨコレートを 口に含む日が 訪れる事を…

明るい日とかいて 明日

「おスケベ、と来たか」

思い出すたびに 顔がニヤけてまう

我ながら、しまりのない顔ばかりしている。
が、今夜ぐらいいいだろう

さつき 話の流れの中で 詩織に告白し、初めてのキスを果たした

そして 止む得ない事情に任せて 詩織を家に連れて帰る

詩織の家は 三年来通い続けた店の近くだった

こんなところに 久しぶりの恋愛相手が住んでいたとは。

外は 霧雨に近い雨が 視界を遮っている

帰りの車の中 程よく 場が和んできた頃、気分的に ラジ
オを掛け流しながら 聞いてみた

「…驚いた？」

彼女としては 突然だったはずの俺の告白

「うん」

確かにそうだろう。

「そんな素振り、分からなかった」

それが 自然な感想だと思う

男として 意識されてなかったのも あるだろうから、な

それを、察した上で ひとつ 暴露話をした

「マスターは 俺が意識する前から 分かっていたみたいだ」

ふふ、と笑って 彼女をみやると 「やだ、うそー」その驚く顔を見届けられた
起伏が少ない彼女から 感情が引き出せてる。小さい優越感に浸りながら 運転に戻った

「はあ、恥ずかしいかも」
小さい苦い息が聞こえた。…そう 気にすることはない。俺もまた
ポーカーフェイスに 顔へ出さないタイプだからね
「まあ、その辺は みんな大人だから」
便利な言葉だ、と思いつつ 左手を 彼女へ預けた
「そろそろ着くよ」

まずは 一緒にいられる
その先を 急いで進めたい気持ちだつてあるけど、欲張らなくても
しばらくは 彼女とは 一緒にいられる

「俺、明日 代休で休みだから 職場まで 送るよ」
「助かるな」 夜だから 全然 道とか覚えられなかったし
たわいもない 日常に近い会話が 既に来る
「なあ、いつそのこと 休めないのか？」

俺、詩織の会社宛の依頼書は 出しきつてる。お前、明日
は 多分 ヒマだせ？」

ニヤッと笑うと 詩織も 笑った

「あー それもありかも。サボっちゃいたいなあ…」
笑うと 左側に八重歯がチラリと見えるのに気が付いたのは、最近だ。

「何だよ、歯切れ悪いな。」

まあ ウチ以外にも 客は いるだろうから 難し

いか…」

こうやって 互いを更に知り合って 付き合いがもっと深くな
っていくのだろう、恋愛って。

「そうなんだよね、午前中だけ出社して 音沙汰なかったら帰ろ
うかなあ」

不動産屋に さっさと見てほしいし。

話を続ける彼女へ 手を差しのべ 降りるよう 促した

傘を刺そうかと思った先程までだったか。

俺たちに 大事な潤いを思い出させた雨は もう 止んでい
て。

雲の切れ間からは 星と月が 真新しく光っていた

「早く寝よう」

全て 新しい明日から始められるのだから

リハビリ ラフ

詩織と不動産屋との立ち会い後のことだった

「昼、何たべようか？」

たわいもない 会話をしながらの帰り道
運転する視界の隅に ふと 引っ掛かる

「悪い、寄り道していいか？」

忘れないうちに買いたいものがある。誤魔化すように
と 店へ向かった

「時間は掛からない。買うものは 決まってるから」

車を止めて 駐車場から歩く俺を 追う詩織

別に何をいう訳でもなく。

詩織もまた 「じゃあ、化粧品、見てきていい？」と 聞いてくる

：付き合いたてなら ベタバタするのもいかもしれない、例えば
今みたいな

だけれど 適度な距離を分かってる相手の方が 俺はいい

颯爽とした後ろ姿を見届けて思う

（やっぱ、いいもんだな）と。

小さく悦に入りながら、俺は 目的の売り場へと向かった

若干、余計な買い物をしていなくもない

レジで会った彼女が レジ袋の膨らみを見ていう。

「半分 払おうか？」

「大丈夫」やんわり 断った

買った物は 柔軟剤とタバコの消臭スプレー そして…もう一つ

袋を覗いた詩織がいう

「この柔軟剤、使ってたんだ」 なんか いい匂いだなあって
思ってたんだ」

だが、その隣の買い物に気が付いたとき 声は止まった。

ご丁寧に、別途紙袋に包まれた長四角の包装。ここ数日の状況と物の形状からして 察すれば、思い当たる筈だ。いい年して いい経験を重ねていれば、特に。

別に 言えないものじゃない。ただ、伝え処には困るけど。

「この先、必要だろ？」

思った物が 想像通りなのが 伝えられて、詩織の喉は 動いた。だが、返事は 確かに聞こえた。

「そうだね」

小さくて、明るくもない声だったが、確かに はっきり聞き取れた

おずおずと 詩織の手が伸びてくる。

自分の利き腕に触れる指。

思うままにさせたくて、下げていた買い物袋を持ち替えた

「行こうか？」「うん」

促す声に 指が肌沿いに降りてきた

重なる手のひらを 指を広げて 出迎えた

すべすべとした 柔らかさのある指、

人指し指で 際の肌を味わうように擦ったら、ピクリと跳ねた

そのさまが　素直で、そして　かわいくて。
周りに人がいないのを確認して引き寄せた。
そして。

頬へ俺からは初めてののはずの感覚を贈った

自分を見る女の目に　身体が動く日が来るとは思わなかった
あのまま　いつまでも続いて　流れていくのだと思っていた
君が　きっかけをくれた。思い出させた

手が重なり、顔が重なり、そして　近い先　今度は…
これは　そんな俺の　リハビリラブ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8146x/>

リハビリ ラブ

2011年11月10日01時16分発行